

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：12101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K21380

研究課題名（和文）修飾要素を用いた自他交替の対照言語学的研究

研究課題名（英文）A Comparative Study of Causative Alternation Using Modifiers

研究代表者

安原 正貴（Yasuhara, Masaki）

茨城大学・教育学部・講師

研究者番号：10738834

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000 円

研究成果の概要（和文）：日英語の反使役自動詞は使役事象を意味的・統語的に認可できるか否かで異なることを提案した。英語の反使役自動詞は構造的に使役事象を含むことができないため、動作主による行為（使役事象）が必要な他動詞は反使役自動詞を持たない。一方、日本語では反使役自動詞は使役事象を含むことができるため、そのような他動詞であっても反使役自動詞用法を持つことができる事例が数多く存在する。この対比は日英語ともに反使役自動詞用法を持つ動詞にも当てはまる。この提案を実証するため、本研究では修飾要素を用いて分析を行い、修飾要素が動詞の語彙的・統語的性質の分析において有効であることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語の動詞 plant は反使役自動詞用法を持たないのに対して、日本語の動詞「植える」は反使役自動詞用法を持つという、日英語間の明確な差異が存在する一方、英語の動詞 open と日本語の動詞「開ける」はどちらも反使役自動詞用法が可能である。本研究の意義は、日英語間で違いが見られる動詞だけではなく、一見、日英語間に違いが無いように思われる動詞に関しても、修飾要素の観点から違いを明らかにした点と、修飾要素が動詞の語彙的・統語的性質の分析において有効であることを支持した点にある。

研究成果の概要（英文）：In this research, I proposed that anticausatives in English and Japanese are different with respect to whether they include a causing event or not. In English, transitive verbs that denote externally caused events do not have anticausative counterparts because English does not permit anticausative structures with a causing event. In Japanese, on the other hand, transitive verbs denoting an externally caused event can often alternate with corresponding anticausatives because Japanese allows anticausative structures with a causing event. This syntactic difference between English and Japanese also applies to anticausatives that share the same meaning in both languages. This research proved this comparative difference by investigating anticausatives from the perspective of co-occurring modifiers.

研究分野：言語学、英語学

キーワード：自他交替 道具句 原因句 修飾要素 反使役自動詞

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、動詞と共に修飾要素に基づく自他交替の研究が通言語的に行われるようになってきている。このような研究で用いられる修飾要素の一つとして、道具句が挙げられる。道具句とは with the key (この鍵で) のように、道具を表す修飾要素を指す。

(i) a. John opened the door with the key.

b. ジョンはその鍵でドアを開けた。

道具句が生起するためには、その道具を使う動作主の存在が必要である。(i) では、他動詞 open (開ける) は、「誰かが何かを開ける」という意味を表すので、動作主の存在を含意することができる。その結果、道具句と共に起ることが可能となる。

動詞 open・「開ける/開く」は日本語と英語どちらにおいても自他交替を許す動詞であり、日英語間で同じ特性をもつ動詞であると考えられてきた。

(ii) a. The door opened.

b. ドアが開いた。

(ii a, b) はどちらも自動詞であり、一見すると日英語において意味的に同じ特性を持つように思われるが、両者には決定的な違いが存在する。その違いは、(iii) のように、道具句のような修飾要素を用いることで初めて明らかとなる。

(iii) a. × The door opened with the key.

b. その鍵でドアが開いた。

英語では自動詞 open が道具句と共に起できないのに対して、日本語では可能である。この事実が示すのは、英語では自動詞 open は動作主の存在を含意できないのに対して、日本語の自動詞「開く」は動作主の存在を含意するという点である。

このように、動詞だけを見たのでは明らかにできなかった動詞の特性が、共に起する修飾要素に焦点を当てることにより浮き彫りになる。英語と違い日本語には、自動詞「植わる」のように、動作主の存在が必要な出来事を表す動詞であっても自動詞用法をもつ動詞が数多く存在する。この日英語間の違いは(iii)の道具句に関する違いと平行的であり、日英語間には自他交替に関わる動詞に関して体系的な違いが存在するのではないかと考え、本研究の調査を行った。

2. 研究の目的

上記のように、日本語と英語には自他交替に関わる動詞と修飾要素の共に起に関して相違点がある。この違いは動詞だけを見たのでは明らかにすることが難しい。本研究の目的は、動詞と共に起する修飾要素に焦点を当てることにより、日英語間には自他交替に関わる動詞に関して体系的な意味的違いが存在することを明らかにすることである。

3. 研究の方法

日英語間の自他交替に関わる動詞の相違点を明らかにするために用いる修飾要素を、先行研究を参照しながら調査する。そして、日英語間で同じ特性を持つと考えられてきた動詞を比較対照し、自他交替に関する日英語間の体系的な相違点を示す証拠を収集する。言語データの収集に関しては、日本語および英語の文を作例し、母語話者に内省判断をしてもらい、その文法性を調査する。

4. 研究成果

本研究の成果は多く分けて3つに大別される。

(1) まず第1に、日本語には2種類の反使役自動詞(anticausative)が存在するが(影山, 1996, 2000)、本研究ではその意味的・統語的特徴を明らかにした。1つ目の種類は、the vase broke / 「花瓶が割れた」のように、日英語で対応する自動詞が存在する反使役自動詞である。このタイプを Type I とする。もう1つの種類は×the tree planted 「木が植わった」のように、英語には日本語に対応する自動詞が存在しない反使役自動詞である。このタイプを Type II とする。意味的な観点では、Type I の反使役自動詞は日英語において共通の特性を持ち、Type II の反使役自動詞はこれとは対をなす。Type I の反使役自動詞は日英語ともに、動作主が関わらなくても発生しうる出来事を表すため、by itself/ 「ひとりでに」という副詞表現と共に起できる。また、動詞が表す出来事は動作主の関与なしに自然に発生することができるため、原因を表す原因句 (from the earthquake / 「地震で」) が共に起したり、対応する他動詞において自然物主語が生じたりすることが可能である。一方、Type II の反使役自動詞は日本語のみに存在し、動作主の関与が必要な出来事を表す。したがって、これら3つの性質を持たない。一方、動作主の様態を修飾する様態副詞(「丁寧に」など)との共に起に関しては、Type I 反使役自動詞は共に起できないのに対して(×花瓶が丁寧に割れた)、Type II 反使役自動詞は共に起することができる(木が丁寧に植わった)。表1はこの結果をまとめたものである。

	Type I (日本語・英語)	Type II (日本語)
by itself / 「ひとりでに」の共起		×
原因句の共起		×
対応する他動詞における自然物主語の生起		×
様態副詞の共起	×	

表 1：日英語の Type I・Type II 反使役自動詞の意味的特徴

このように、意味的な観点に基づくと、Type I 反使役自動詞は日英語において同じ性質を持っており、これと対立する形で Type II 反使役自動詞が日本語には存在する。

一方、統語的な観点から見ると、これとは異なる結果が現れる。英語の Type I 反使役自動詞は道具句(with a hammer など)や手段を表す by 句(by dropping it onto the floor など)と共起できないのに対して、日本語では Type I・II どちらに関してもこれらの要素と共起することができる。道具句や手段を表す by (～によって) 句は動作主の関与を明示する修飾要素である。Type I 反使役自動詞は日英語ともに意味的には動作主の存在を含意しない動詞であるため、これらの修飾要素は統語的に認可されていると考えられる。また、同じ Type I 反使役自動詞でありながら日本語と英語で共起可能性に関して差異が見られることから、この統語的な特性の有無は動詞のタイプによる差ではなく、日本語と英語との間の言語差であると言える。

	Type I (英語)	Type I・II (日本語)
道具句の共起	×	
手段を表す by (～によって) 句の共起	×	

表 2：日英語の Type I・Type II 反使役自動詞の統語的特徴

以上から、Type I と Type II の反使役自動詞は意味的に区別することができるが、統語的な観点から見ると、動詞のタイプに関わらず、日本語と英語には差異が観察される。本研究では、この言語間の統語的な差異が Alexiadou et al. (2015)が提唱する機能範疇 expletive Voice を援用しながら理論的に捉えられることを明らかにした。

(2) 本研究で得られた第 2 の成果は、受動態の動詞と同形の反使役自動詞に関するものである。ギリシャ語をはじめ、世界の言語の幾つかにおいては、反使役自動詞と受動態の動詞が同じ形になる場合がある。Alexiadou et al. (2015)は、受動態の動詞と同形の反使役自動詞には機能範疇 expletive Voice が統語的に関わっていると提案しているが、本研究では、この分析が日本語にも当てはまることを示した。修飾要素である原因句は通言語的に反使役自動詞とは共起できるが、受動態の動詞とは共起できない。この観察を日本語における外的原因により引き起こされる出来事を表す動詞に適用し、ギリシャ語に関して Alexiadou et al. (2015)が行った分析が日本語にも当てはまることを明らかにした。

(3) 本研究で得られた第 3 の成果は、英語における特定の動詞の自他交替の可否を原理的に説明したことである。英語において一般に、外的原因によって引き起こされる出来事を表す動詞は反使役自動詞を形成しにくい。例えば、動詞 cut をはじめとする cut 類動詞は「鋭い刃物などで切る」という意味を表し、外的原因の存在を前提とする。先行研究では、この意味的特性により、cut 類動詞は反使役自動詞用法を持たないと説明されてきた。しかし、動詞 bake をはじめとする調理動詞も、「熱や調理器具などで焼く」という意味を表し、同じく外的原因の存在を前提とする。しかしながら、調理動詞は反使役自動詞用法が可能である。cut 類動詞と調理動詞はどちらも外的原因の存在を語彙的に含意するが、その語彙化された外的原因の種類が異なる。cut 類動詞は制御的原因(controlled cause)を、調理動詞は自発的原因(autonomous cause)を語彙的に含意する。これら 2 種類の語彙化された原因は、原因を表す 2 種類の修飾要素と対応している。制御的原因は動作主などによる制御を要するタイプの原因を表し、典型的には道具句などの修飾要素として明示的に文中に現れることができる。一方、自発的原因は動作主などによる制御を要さず、自発的に出来事を引き起こすことができるタイプの原因を表し、in the oven のような場所句などの修飾要素として明示的に文中に現れることができる。制御的原因を表す修飾要素は反使役自動詞と共起することができないのに対して自発的原因を表す修飾要素は共起可能である。したがって、制御的原因は統語的に外項を認可する構造に生起しなければならないため、制御的原因を語彙化する cut 類動詞は反使役自動詞用法を持つことができない。一方、自発的原因は統語的に外項が認可されない構造でも生起できるため、自発的原因を語彙化する調理動詞は反使役自動詞用法を持つことができる。

本研究では、修飾要素の観点から、上記のように自他交替に関する新たな分析や提案を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 14件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Masaki Yasuhara	4. 巻 1
2. 論文標題 Anticausatives Taking an Accusative Object in Japanese	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the 12th Generative Linguistics in the Old World & the 21st Seoul International Conference on Generative Grammar	6. 最初と最後の頁 614-623
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masaki Yasuhara	4. 巻 36
2. 論文標題 Small Clauses Further Specifying Verbal Meaning	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 216-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masaki Yasuhara	4. 巻 49
2. 論文標題 Two Types of Small Clauses and Manner/Result Verb Classes	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 英米文化	6. 最初と最後の頁 21-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masaki Yasuhara	4. 巻 3
2. 論文標題 A Corpus-based Analysis of Marked Anti-causatives in English	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Data Science in Collaboration	6. 最初と最後の頁 76-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masaki Yasuhara	4. 巻 88
2. 論文標題 Syntactically Transitive but Semantically Anti-causative: An Expletive Voice Account of Adversity Causatives in Japanese	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 MIT Working Papers in Linguistics	6. 最初と最後の頁 457-463
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masaki Yasuhara	4. 巻 35
2. 論文標題 Two Types of External Causes and an Implication for Causative Alternation	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 122-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masaki Yasuhara	4. 巻 1
2. 論文標題 Secondary Agent Constructions from the Viewpoint of a Manipulated Object	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Verbs, Clauses and Constructions: Functional and Typological Approaches	6. 最初と最後の頁 317-336
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masaki Yasuhara	4. 巻 36
2. 論文標題 Break a Branch off a Tree: An Account Based on Further Specification	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 315-321
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yasuhara Masaki	4. 巻 83
2. 論文標題 Anti-causatives of Externally Caused Event: A Comparative Study	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 MIT Working Papers in Linguistics	6. 最初と最後の頁 333-344
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yasuhara Masaki and Nishimaki Kazuya	4. 巻 83
2. 論文標題 A Unified Account of Directed Motion Constructions in English and Japanese	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 MIT Working Papers in Linguistics	6. 最初と最後の頁 321-332
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Yasuhara Masaki	4. 巻 19
2. 論文標題 Transitive Sentences Denoting an Anti-causative Eventuality in Japanese	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Proceedings of the 19th Seoul International Conference on Generative Grammar	6. 最初と最後の頁 323-340
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yasuhara Masaki	4. 巻 1
2. 論文標題 Secondary Agent Constructions from the Perspective of the Motion Inherent to Manner-of-Action	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Data Science in Collaboration	6. 最初と最後の頁 180-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安原正貴	4. 巻 26
2. 論文標題 The Isomorphism between Passives and Anti-causatives in Japanese: A Comparative Study of the Causative Alternation	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Studies in Generative Grammar	6. 最初と最後の頁 143-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安原正貴	4. 巻 34
2. 論文標題 Two Types of External Causes	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 304-310
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 12件）

1. 発表者名 Masaki Yasuhara
2. 発表標題 Two types of anti-causatives in English: A cross-linguistic perspective
3. 学会等名 The 12th International Spring Forum 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masaki Yasuhara
2. 発表標題 Anticausatives Taking an Accusative Object in Japanese
3. 学会等名 The 12th Generative Linguistics in the Old World & the 21st Seoul International Conference on Generative Grammar (国際学会)
4. 発表年 2019年

1．発表者名 安原正貴
2．発表標題 日本語と英語の反使役動詞について
3．学会等名 第7回筑波英語学若手研究会
4．発表年 2019年

1．発表者名 Masaki Yasuhara
2．発表標題 A Corpus-based Analysis of Marked Anti-causatives in English
3．学会等名 Data Science in Collaboration 3 (国際学会)
4．発表年 2019年

1．発表者名 Masaki Yasuhara
2．発表標題 Break a branch off a tree: An account based on further specification
3．学会等名 ELSJ 11th International Spring Forum 2018 (国際学会)
4．発表年 2018年

1．発表者名 安原正貴
2．発表標題 英語における様態動詞がとる2種類の小節構造
3．学会等名 英米文化学会第155回例会
4．発表年 2018年

1．発表者名 安原正貴
2．発表標題 動詞の意味を詳述指定する小節構造
3．学会等名 日本英語学会第36回大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 Yasuhara Masaki
2．発表標題 Syntactically Transitive but Semantically Anti-causative: An Expletive Voice Account of Adversity Causatives in Japanese
3．学会等名 The 13th Workshop on Altaic Formal Linguistics (国際学会)
4．発表年 2017年

1．発表者名 Yasuhara Masaki
2．発表標題 Transitive Sentences Denoting an Anti-causative Eventuality in Japanese
3．学会等名 Seoul International Conference on Generative Grammar (国際学会)
4．発表年 2017年

1．発表者名 Yasuhara Masaki
2．発表標題 Secondary Agent Constructions from the Perspective of the Motion Inherent to Manner-of-Action
3．学会等名 Tsukuba Global Science Week 2017 (国際学会)
4．発表年 2017年

1．発表者名 安原正貴
2．発表標題 Two Types of External Causes
3．学会等名 日本英語学会国際春季フォーラム（国際学会）
4．発表年 2016年

1．発表者名 安原正貴，西牧和也
2．発表標題 A Unified Account of Directed Motion Constructions in English and Japanese
3．学会等名 Workshop on Altaic Formal Linguistics（国際学会）
4．発表年 2016年

1．発表者名 安原正貴
2．発表標題 Anti-causatives of Externally Caused Event: A Comparative Study
3．学会等名 Workshop on Altaic Formal Linguistics（国際学会）
4．発表年 2016年

1．発表者名 安原正貴
2．発表標題 Marked/Unmarked Anti-causative Pairs of “Verbal Noun and Suru” Expressions
3．学会等名 Japanese/Korean Linguistics Conference（国際学会）
4．発表年 2016年

1 . 発表者名 安原正貴
2 . 発表標題 Secondary Agent Constructions from the Viewpoint of a Manipulated Object
3 . 学会等名 International Symposium on Verbs, Clauses and Constructions (国際学会)
4 . 発表年 2016年

〔 図書 〕 計0件

〔 産業財産権 〕

〔 その他 〕

-

6 . 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	-------------------------------	-------------------------	----